

都道府県別賞一等

おじいちゃんが残してくれたもの

京都府 長岡京市立長岡第三中学校 三学年

木村 友亮

先日、おじいちゃんが七十四歳で亡くなりました。そのとき、たくさんのことを思い出しました。小さい頃遊んでもらったこと、一緒に犬の散歩をしたこと、どんなときでも味方になって僕のことを応援してくれていたことなどです。その中でもすごく心に残っていることがあります。今年の一月、おじいちゃんの亡くなる五カ月ほど前のことでした。

お正月、おじいちゃんの家へ家族で帰りました。おじいちゃんは十年ほど前に奥さん、つまり僕のおばあちゃんと死別し、それから一人で生活していました。そのような環境にあったせいか、物忘れなどが去年の春頃から少し増えてきていました。年のせいかと思っていました。あまりにもひどくなりそう。で病院へ行くと、医者からアルツハイマー病だと診断されてしまいました。お正月は、そんな病にかかり進行している、そんなときでした。会話はとぎれとぎれ、同じことを何度も何度もきいてくる。お年玉とは何かもわからない。でも、そんなときに僕にかけてくれた言葉がありました。

「ゆうちゃんはもうすぐ受験があるんやな。受験が終わっても気引き締めて、将来もやりたいことやるんやで。じいじ応援してるからな。」と。

そのとき、色んなことを忘れてはいるはずなのに、そういう元気の出るような言葉をかけてもらえたことにびっくりしたのと同時に、頑張るぞと気合いが入りました。また、自分のことを覚えていてくれて、気にかけてもらえていたことがすごくうれしかったです。

それから五カ月、おじいちゃんは病院で頭を打って倒れ、数日後に亡くなりました。そのときおじいちゃんの支えとなったであろうものがありました。それは、お見舞いに来た友人や親族、もう一つは保険でした。

最後の最後まで治療を受け続けることができたのも保険のおかげです。また、亡くなった後にも保険金を受け取れることになったため、田舎の小豆島へ納骨をしに行くことができました。

保険金を受け取るために、おじいちゃんの住んでいたところや、家族であることの証明などをしなければいけないことを知って、自分がおじいちゃんにしてあげられることはそれくらいしかないんだと思って全て僕がとりました。四つの役所を回り、小豆島の役所には郵便を出しました。おじいちゃんも少しは喜んでくれたかなと思います。

## 第54回中学生作文コンクール

そして、母は僕にこう言いました。

「おじいちゃんが残してくれたお金は大切にとっておくから、高校・大学、そして将来好きなことを見つけて頑張ろうね。」と。

ふと、おじいちゃんが言っていたことを思い出し、泣き出してしまいそうになりました。おじいちゃんは僕に、頑張れよという思いや希望を残してくれたのだと思いました。

また、保険にも感謝しています。おじいちゃんを最後まで支えてもらい、さらに僕たち次の世代、そのまた次の世代へとずっと支え続けてもらえると思うと、保険は大切だなと思います。

僕は、おじいちゃんからの支えを忘れず、立派な大人になりたいと改めて実感しましたし、これからも見守ってくれるおじいちゃんに感謝したいと思います。

今もどこかでおじいちゃんがニコツと笑ったような気がしました。